

慶長使節船ミュージアムの今後の整備方針

1 整備方針（総括）

<原寸大の迫力を上回る魅力あるミュージアムへの転換>

慶長使節船ミュージアムを牡鹿半島の玄関口として位置づけ、周辺の観光資源や周辺地域との連携を図り、船、ミュージアム、パークの一体的な活用による賑わいの場を創出することで、慶長遣欧使節の偉業の継承、海洋文化の振興、交流人口の拡大に貢献する。

2 個別の方針・取組

1 ミュージアム全体の方向性

■文化施設としての役割を果たすとともに地域振興の拠点として、震災からの創造的復興の象徴となるような施設として貢献

- ①石巻地域における交流人口の拡大に向けた「賑わいの場」の創出
- ②牡鹿半島の玄関口として位置付け、ミュージアムとパークの一体的な活用を推進
- ③周辺施設や周辺地域と連携し、「観光」や「教育」的側面を強化

2 後継船

■現復元船の迫力を補完する取組と外観の再現度や維持管理費用を十分に考慮した整備

- ①素材は再現度と維持管理の容易さを考慮したFRP
- ②ドックの活用を視野に入れた1/4大で復元
- ③VR及び展示の工夫で規模感を補完

3 展示策

■これまでの歩みや研究成果を反映する展示や体験型展示、原寸大の規模感を補う展示や映像の工夫

- ①現船の一部をドック周辺に展示（船艙、肋骨材など）
→規模感や当時の造船技術を伝えるための展示方策について検討
- ②ドックの空間活用（プロジェクションマッピング、ドック内イベントなど）
- ③アーカイブ活用大型映像シアターの整備、海洋文化体験ゾーンの設置
- ④慶長遣欧使節の時代から現在に至るまでのサン・ファンを紹介（別紙参考イメージ）
- ⑤展示の具体案は新たにワーキンググループを設置し検討

4 誘客策

■周辺施設や周辺地域と連携し、「観光」や「教育」的側面を強化した文化施設として、石巻地域における交流人口拡大に貢献する取組を推進

【観光】

- ①ミュージアムを軸とした周遊コースの設定
- ②インバウンド対策に向けた多言語化標識等の整備
- ③海側からのアプローチを検討

【教育】

- ④県内外教育機関の教育旅行誘致、校外学習での活用促進
- ⑤大学等のゼミ活動での活用促進

【連携・情報発信】

- ⑥県及び市町村観光部局との連携
・観光拠点としての位置づけ ・広報媒体の相互利用 ・イベントの共同企画など
- ⑦県及び市町村教育委員会との連携
・校外学習の共同企画（再掲） ・みやぎ県民大学でのメニュー化など
- ⑧県内外市町村・民間との連携
・慶長遣欧使節と縁のある自治体や各交流団体との共同企画、広報媒体相互利用
・石巻DMO、リボンアート・フェスティバル、ツール・ド・東北との連携
・JR東日本との連携、東京アンテナショップの活用 など

【二次交通】

- ⑨「二次交通」の充実に向けた関係機関との連携

3 具体化に向けた対応

- 県の整備方針や取組を具体化するワーキンググループ（WG）を設置
（想定WG：誘客WG、現船解体・再利用WG、展示リニューアルWG、後継船整備WG）
構成：宮城県、石巻市、（一社）石巻観光協会、（公財）慶長遣欧使節船協会ほか
- ※ 検討内容は平成31年度策定予定の基本計画に反映させる。

（参考1） 整備方針決定までの経緯

- 慶長使節船復元船サン・ファン・パウティスタについて、県では、平成29年8月に、「復元船を木造船のまま修復し、保存していくことは断念する」「復元船は、日々のメンテナンスを丁寧に行い、東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020年まで展示する」などの方針を決定。
- 2020年以降の復元船及び慶長使節船ミュージアムの在り方については、「慶長使節船ミュージアムの今後のあり方検討委員会」での意見等を踏まえ、県としての整備方針を決定。

【今後のあり方検討委員会開催状況】

	期 日	内 容
第1回	平成29年 8月29日	復元船視察、現況説明、意見交換
第2回	平成29年10月24日	コンセプト（ターゲット）及び復元船後継策の意見交換
第3回	平成29年12月26日	アーカイブ活用策の紹介・意見交換
第4回	平成30年 3月22日	アーカイブ業務成果品（VR映像）紹介・誘客施策の意見交換
第5回	平成30年11月 8日	復元船後継策（後継船及び新たな展示）の提示・意見交換
第6回	平成31年 2月 1日	これまでの議論を踏まえた今後の整備の方向性

（参考2） あり方検討委員会における主な意見（全体：延べ120件）

1 ミュージアム全体の方向性（24件）

- ①慶長遣欧使節の偉業の継承という役割を継承しつつも観光施設としての位置づけを明確にしてほしい。
- ②船、ミュージアム、パークが一体になって次へ進むべき。観光戦略の一環として一体的に取り組みたい。
- ③観光資源として魅力ある牡鹿半島の中の一施設として広い視野の中であり方を検討すべき。

2 復元船の後継船（37件）

- ①見た目の迫力は原寸大に勝るものはない。
- ②原寸大での復元を希望するが、船について何を伝えていくか整理し、それが伝わるのであれば原寸大にはこだわらない。費用対効果の十分な検証を。
- ③1/4大案はドック活用で企画の自由度が高まる。原寸のスケール感はドックの大きさやVR活用で体感できる。船にこだわらず観光のツールとして活用してはどうか。

3 展示策（アーカイブ・ドック活用、展示室等）（20件）

- ①復元船建造後に明らかとなった研究成果や仙台藩の造船技術などを新たな展示に反映させてはいいかがか。
- ②子どもたちが体感できる体験教室プログラムの導入を。
- ③ドック活用は非常に面白い。現船の活用方策や映像のクオリティなど原寸大の迫力を上回るコンテンツのイメージがほしい。展示棟のシアターや展示室の具体案を示してもらいたい。

4 誘客施策（39件）

- ①石ノ森萬画館などとの施設間、近隣地域の観光資源と連携し賑わいを創出することが重要。
- ②インバウンド促進に向け、県・市観光戦略への位置づけやJR仙台駅・仙台空港からの情報発信が大事。
- ③観光、教育分野との連携や震災の風化防止を目的とした取組を充実させる必要がある。